



## 古山 優太さん(南津島)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田  
取材日：5月27日

### あれからほとんど休むことなく、 再建を目指して

いわき市三和。南側が開けた丘陵地の山林に、親戚一同の力を借り4年をかけて整備してきた牛舎と、三世代の家族9人が住む家で新たな生活が始まったのが今年の2月。

今は、自前で飼う繁殖牛と子牛120頭を、以前の規模の300頭に戻し、さらに牧場を広げること目標にしているとのこと。また今年9月、和牛のオリンピックとも言われる「第11回全国和牛能力共進会 宮城大会」が仙台市で開かれるため、来月末に行われる福島県の予選会に向けた準備を進めていっしょるそうで、古山さん親子の奮闘は、まだまだ続きそうです。



▲右から、長男の瑞久君6才、次男の水樹君4才、  
長女の沙優ちゃん2才に囲まれた優太さん

◆2012年春、親子で牧場を再開。今年からは家族全員一緒に

野台の仮設住宅に移りましたが、さらに大原の牧場に引っ越して、25頭の牛の世話が続けました。思えば、1日も休まずに今日までやってきました。

「いつまでいわき市に」と聞かれることもありましたが、戻っても当分は住めないでしょうし、牧草のことや牛肉の出荷制限もあるでしょう。ひとの口に入るものを育てることは、かなり難しいはず。ですから、今はここでやっていきますよ。

◆父は津島、私は南相馬で牧場を営んでいました  
震災の年の1月1日に長男が生まれ、妻と息子が3月3日に南相馬市原町区大原の自宅に戻ってからもまもなくの災害でした。地震発生後、祖父母と両親が住む実家の様子が気になり、私一人で午後7時頃に34号線を辿って津島に向いました。原浪トンネルを抜けて114号がひどく渋滞していて、変だと思いましたね。翌朝、父は飼っていた牛たちに3日分の餌を与えて、東和体育館に避難しました。

その後は毎日、東和と原町を朝夕往復しながら、世話をする生活が続きました。妻と息子は、大原の自宅から、妻の姉が嫁いだ会津地方に避難し、5月までお世話になりました。  
一方、祖父母は二本松市の二次避難所から仮設住宅に入居。父は県に頼んで牧場を探してもらい、6月に津島からいわき市遠野に移るため、300頭近くの牛を移動させました。牛のスクリーニングも大変でしたが、移送がまた大変。トラックには15頭しか乗せられず、その上、牧場への道がとても狭かったため、2トトラックに数頭ずつ移し替えて運びました。父は最悪だったと話していましたよ。

父が営む遠野の牧場には、預託された牛も含めて1,000頭ほどが増えていましたので、私も一緒に牧場を続けることになり、同じ町内に親世帯と子世帯、家を2軒借りました。ところが、大雪の年に牛舎が大破してしまい、いわき市勿来に牧場を移して2016年3月まで営業を続けました。  
牧場は地元の人たちの承諾が必要ですので、新たな土地探しは苦労しましたが、やっと見つかりました。私もいずれば津島に戻りつもりでしたが、10代で家を離れてから、久しぶりの三世代同居になります。そして、震災の年に生まれた長男は小学1年生になりました。

# 浪江のこころ通信

◆第74号◆

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この「浪江のこころプロジェクト」は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第74号への感想をお寄せください。  
【連絡先】〒979-1592  
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0240(34)4593





## 田辺 美保さん(棚塩)

取材者：(特活)くびき野NPOサポートセンター 新保  
取材日：6月9日

### 将来の夢に向かって自立を



▲「自転車で古本屋めぐりをするのが楽しいです」と笑顔を見せる田辺さん

現在、新潟県新潟市で学生生活を送っている田辺美保さん。  
田辺さんの通っている専門学校で、学校生活や将来のこと、休日の楽しみ、最後には浪江町への想いについて伺いました。

◆システムエンジニアを目指して  
私は、新潟市のコンピュータ関係を学ぶ4年制の専門学校へ通っていて、今年2年生になりました。学校では、Webページを製作したり、自分で課題を決めてシステムの製作などに取り組んでいます。  
昨年、進学をきっかけに同じ新潟県内の三条市に住む家族のもとを離れ、一人暮らしを始めました。新生活も少しずつ慣れてきました。学校生活とアルバイトの両立は大変です。休日は、趣味の読書や自転車で古本屋めぐりを楽しんでいます。特

◆震災は誰のせいでもない  
震災があったのは、私が中学1年生で卒業式の日でした。父が漁師をしていたため、地震発生時すぐに津波の危険性を教えられ高い所へ避難しました。その後、学校や親戚の家などで避難生活を送り、バスでたまたま新潟県三条市へ。三条市内の体育館で2、3か月過ごし、そのまま同じ市内の借家に移りました。始めは、新潟の気候

にミステリー小説を読むのが好きで、古本屋で絶版の本を探したりするのがワクワクしますね。  
将来は、システムエンジニアなどコンピュータ関係の仕事に就くのが夢です。福島県内にそのような就職先があればとも思います。今はまだ「場所」を決めていません。両親からは「18歳を過ぎたら、自分のことは自分で考えて自立しなさい」と言われているので、自分の将来についてこれからゆっくり考えていきたいです。

や生活環境など慣れないことも多かったです。特に戸惑ったのが「ごめんください」という言葉。新潟では、近所のお宅に訪問する時やスーパーなどで知っている人に会うと「こんにちは」の代わりに「ごめんください」を使うことが多いです。  
あの日以来、地震や津波による甚大な被害、原発の問題などがありますが、震災は誰のせいでもないと思っています。沿岸部ではこんなに被害が大きくなると思わず油断していた人たちも多かったと思います。  
今までも私は何度か浪江町へ一時帰宅していますが、高校生の妹と中学生の弟は震災当時二人とも幼かったため、浪江町で過ごした記憶はほとんどないようです。私自身は、時間が経てたらまた帰りたいなと思っています。  
震災で離ればなれになってしまった友人たちとはほとんど連絡を取っていないので、来年の成人式で会えたら嬉しいですね。



## 高倉 孝二さん・幸子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：6月8日

### 孫を迎え入れることができる家に住みたい



▲畑の前で笑顔の高倉さんご夫婦

震災当時、長男夫婦、お孫さんと一緒に暮らしていた高倉さんご夫婦。長女、次女家族と津島小学校、あずま運動公園(福島市)を経て千葉県柏市に避難、今はNTT社宅で暮らしています。被災者用に提供されたNTT社宅には、震災直後には多くの人たちが暮らしていましたが、相次いで転居。今は一棟に数家族が暮らすという状況です。

◆家族はばらばらに  
震災後、私たち夫婦と長女、次女家族、甥っ子の11人で避難した。柏市の叔母さんに、空き家になっていた家を提供してもらったけれど、3か月ほどで出ざるを得なくなり、慌てて市役所に通い、ここを紹介してもらった。次女は震災直後に、いわきの病院で出産、生後10日の孫と一緒にこの社宅にきた。不自由な思いをさせてしまった。浪江の家だったらと思ってしまう。その後、長女夫婦は柏の葉にマンションを買った。次女夫婦は夫の転勤先で行った秋田で暮らしている。今は、夫婦二人で暮らしている。娘たちの家を訪ねて、孫たちの顔を見るのが何よりの楽しみになっている。でも、もし震災がなかったら、浪江の家で私たち夫婦が、子どもたち、孫たちを迎え入れることができたのと思う。

◆診断書を書いてもらえない  
震災後、ストレスで眠れなくなったのに合わせて不整脈の症状が悪化し、いくつかの病院を受診した。東京電力の賠償手続をするためには、原発事故由来であるという診断書が必要なのだけれど、最初

◆野菜作りとパークゴルフが楽しみ  
ここに来てしばらくしてから野菜作りを始めた。もともと畑ではなかったが、スコップ一本で掘り起こし、落ち葉でたい肥を作り、3年目からやっと野菜が作れるようになった。できた野菜は周辺の人たちに配ったが、「放射能がこわい」と受け取ってもらえないこともあった。そこで、市役所に放射線量の計測を依頼、畑は大丈夫だったが、集合住宅の雨どい

にかかった病院では書いてもらえなかった。『どうして書いてくれないのか』と尋ねたら、「ストレスは誰にもある、自分にだってある。この病院では、原発事故に関係のない病気には診断書は書けない」と言われ、説明を求めに行ったら、事務職員と事務長に抱きかえられて外に放り出された。原発事故によって変えられた暮らしと通常の暮らしを同じ尺度ではかるとは、悔しかったね。  
震災前のかかりつけ医にも相談したが、「しばらく診ていないから診断書は書けない」と言われた。二本松まで通院するわけにもいかない。その後、紹介された東葛病院付属診療所で胃がんの検査を受けたら、脳梗塞を起こす寸前だと言われ、即入院になった。そんなに悪い状態とは思っていません。家族全員を集めた。手術をしてから1年余り、今も不整脈と、うつ状態で通院している。

◆新しい住まい  
いわき市の復興公営住宅と今の住まいを歩き来していたが、来年3月には完全に引っ越し予定でいる。新築一戸建てだから暮らしやすくなると思うが、引っ越し準備に時間をかけているうちに床下の湿気が部屋にこもり、ステンドレスの家具が錆びたり、臭いがしたりで少し困っている。  
浪江の避難指示が3月31日に解除になったが、全域解除でなかったのが残念。同時解除を訴えてきたのではなかったか。山林の除染もして、皆が帰れるようにしてほしい。住む人間の数が多くならないとイノシシの町になってしまわないではないか。ただ、今の状況では、浪江の家に孫たちを迎え入れるのは難しい。今は帰れなくとも、いつかは帰りたいなあ。

周辺、角地1m前後5か所は立ち入り禁止区域になった。畑の作業がなかったら、本当に味気ない生活だったと思う。もう一つの楽しみがパークゴルフ。震災前からの仲間が週に1回は集まって楽しんでいる。茨城や岩手、遠距離でも苦にならない。パークゴルフをやっている時は、悔しかったこと、哀しかったことを忘れられる。  
▲立ち入り禁止!



▲立ち入り禁止!